

ときめきリーフノベル

ある晴れた日の昼下がり



文・高安義郎 絵・芝 章一

ある晴れた日の昼下がり、和人の祖父が縁側のロッキングチェアに腰掛けていると、中学生になつた孫の和人が脇に座り、
「またお爺ちゃんの好きな歴史の話を聞かせてよ。僕勉強は嫌いだけどお爺ちゃんの話は好きなんだ」
祖父はにっこり笑うと、「カズは勉強が嫌いか」
「うん」確かに和人は勉強に興味が無く、通知表は一こそ無いが二と三ばかりだつた。
「おじいちゃん、どうして勉強しなくちゃいけないの」和人が聞いた。そこへ通りかかった母親が、「大人になつた時役に立つらしいから」と言った。和人は、「そうだよ、嫌いな化学式を覚えたつて役に立たないし」

ある晴れた日の昼下がり、和人の祖父が縁側のロッキングチェアに腰掛けていると、中学生になつた孫の和人が脇に座り、
「大学に行けば嫌いな物は少しで好きな勉強が沢山やれるぞ」
「でも大学に入る時の試験にはいろんな科目があるじゃん」
和人の質問に、また母親が言った。
「大学は定員があるから落とす為よ」とすると、「母親のお前がそんないい加減な考え方」
「本があるってことをどうして知るんだ？」
「学校の先生が教えれば」
「そうだろ。だから先生は広く広くみんなに教える為にある」
「僕勉強の意味がわからんないし興味が無いってことは、頭が悪いからかなあ」
「そうじやない。興味を持つ対象が見つかっていいないだけだ。生きている間は全く無名だつたゴッホという画家は二十七歳まで絵描きになろうとは思つていなかつた。最初は牧師になつて、それから絵に興味を持つようになつた」「もっと早く興味を持てば、生きていなさい」
そう言つて祖父は話しだした。

「勉強には将来役に立つものもあるが、心を豊かにすると同時に、文化の継承という目的がある。人類がこれまでに知り得た事を次の時代に引き継ぎ、それを更に次の人に伝える作業だ」
「そんなの学校の先生がやれば良い人も焦らなくていいから、興味が持つ物を見つけることだ」「僕遊ぶことに興味があるよ」「遊びることも結構。だが自分を精神的に高める物でなくては遣り甲斐が無いだろう。遊びの多くは単にてもあましに時間を使つただけだ。遊びはあくまで張り詰めた心を緩めるためのもので、生徒は浅く広く学べばいい。その中に何人かが興味を持つて深く勉強しようと思う者が出て来ればそれでいいんだ」
「世界中の誰も興味を持たなかつたら、その勉強はどうなるの？」
「その科目は廃れて人間が知つた知識や技術が一つ消えるわけだ」「本に書いておけば良いじゃん」
「本があるってことをどうして知るんだ？」
「学校の先生が教えれば」
「そうだろ。だから先生は広く広くみんなに教える為にある」
「僕勉強の意味がわからんないし興味が無いってことは、頭が悪いからかなあ」「そうじやない。興味を持つ対象が見つかっていいないだけだ。生きている間は全く無名だつたゴッホという画家は二十七歳まで絵描きになろうとは思つていなかつた。最初は牧師になつて、それから絵に興味を持つようになつた」「もっと早く興味を持てば、生きていなさい」
「興味を探す為に勉強するのもいいかも」小声で呟いた。
和人の勉強態度が変わつたのはこの時からだつた。そしてその年の暮れの通知表は、不思議に二と三が無くなつていたのだつた。